倫理つれづれ(10)

倫理へのイメージ

先日，ある企業より依頼を受け，技術倫理に関する講演と事例の取組みを合わせた約5時間の研修を行ったのですが，参加いただいた方の感想に「先生が，一目見て妊婦さんとわかり，普通の女性なんだなって，なんだかとても安心しました」というものがあり，思わず笑ってしまいました。そもそも倫理の講演というと，「叱られるもの」，「厳しい律を要請されるもの」といったイメージが強く(私は，常に元気が出る，聞いた内容を実行したくなるようなメッセージを伝えられるよう，心がけているつもりなのですが)，そうした「倫理」に加え「女性」とくると，とってもキビシイ方つまり，少々浮世離れした潔白さ，完璧さを持っている方を想像してしまわれていたのでしょう。でも，コメントをくださった方の感覚が特別なのではなく，かなり多くの方がこうした感覚をお持ちなのではないかと思います。

倫理委員会に対してのイメージも，同じです。私は第一期からの委員であるため，原子力学会の倫理委員会の雰囲気は，一定の緊張感を保ちながら，ある面ではアットホームというのでしょうか。率直な意見交換，自由な議論を行える場である現状を至極当然としていますが，新たに委員となられた方，あるいは傍聴にいらした方からは，「倫理委員会の雰囲気が予想していたものと違って驚いた」，「倫理委員会は楽しい委員会ですね」といった感想をいただきます。その感想はとてもうれしいものですが，前提には「倫理委員会＝みんなしかめ面をしており，時には糾弾をするような厳しい会議」があり，「委員＝堅物」といったイメージとなってしまうのでしょう。もちろん議題によっては厳しいときもありますが，委員各自の持つ知識や経験に基づいた率直な意見，時には悩みの吐露があってこその倫理委員会であり，委員は委員会活動，あるいは通常の業務，普段の行動において，みなさんと同じように悩んでいる人なのです。そして，その集団が倫理委員会です。

ところで，9月に北海道大学で開催される秋の大会において，委員会企画セッション：「事例研修の意義と課題—倫理規程の浸透を目指して」として，外部講演者による「倫理教育における事例研修の意義と課題」の講演，東京電力所属の委員による「事例研修を活用した企業倫理定着活動—東京電力における活動例」の講演，7月末に発行された倫理に関する事例集を使った研修の試行を予定しています(詳細は，別頁に掲載の秋の大会プログラム，ならびに秋の大会のみどころをご参照ください)。ところが，ここで東京電力の方からお話いただくことについて，「こんな講演をして，もう不祥事を起こさないといえるのか」，「まだ禊が済んだとはいえないだろう」といった声が聞こえてきました。私は技術倫理を専門とし，企業倫理についても調査している研究者として，東京電力の取組みには他社の参考になる優れたものが多く含まれていると評価しています。と同時に，東京電力がさまざまな倫理に関する取組みを展開する前提に常に不祥事への反省があり，また，担当者を中心に活動内容，効果等々多くの悩みを抱えながら取組んでいらっしゃることも感じています。ですから，こうした場でお話いただくことへの意義を認めることはもちろん，講演を引き受けてくださったことを非常に感謝しています。しかし，外から聞こえてきた声の背景には，倫理について語るような人(組織)は潔白でなければならず，不祥事などもってのほかという考えがあるのではないでしょうか。でも，そうした考えでいては，せっかくの優れた取組みを評価し，広めることもできませんし，いつまでたっても倫理は現状の改善には役立たない浮世離れしたものとなってしまうように感じます。

「倫理」の定義はいろいろありますが，私がよく使うのは，倫理学者のOliver. A. Johnson氏のいった「行動の科学である」という言葉です。すなわち，どうすれば現状より優れた行動が取れるのかを論理的，合理的に検討するものが倫理であると私は理解しています。ですから，倫理を研究する者には，現状を正しく把握できる「普通さ」が必要ですし，また倫理の活動には「浮世」のものである以上，「優れている」はあっても「完全である」はない，終わりのない旅だという認識が必要だと思うのです。その旅の途中では，見落とし等から思いがけない落とし穴もあるでしょう。あって当然です。でも倫理でも「失敗は成功のもと」であり，落ちた穴をしっかり検討することで，より良くなれることもあるのです。

倫理に取り組んでいる者，倫理の活動に対して，「完璧」，「潔白」といった連想をもたれる方がいらっしゃったら，その連想は捨てていただければと思います。

(倫理委員会・大場恭子)